

J. S. バッハ作曲「三声シンフォニア」の楽曲分析と演奏解釈

——第2番 ハ短調 BWV 788——

藤 本 逸 子

はじめに

この小論に先立ち、「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』¹⁾の楽曲分析と演奏解釈」²⁾と題し、「第1番 ハ長調 BWV772³⁾」から「第11番 ト短調 BWV 782」までの11曲を、「豊橋短期大学研究紀要 第2号」から「同第12号」の各号に、それぞれ楽曲分析し演奏解釈した。また、「第12番 イ長調 BWV 783」から「第15番 ロ短調 BWV 786」までを、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第14号」から「同第17号」に、同じく楽曲分析し演奏解釈した。続いて、「J. S. バッハ作曲『三声シンフォニア』の楽曲分析と演奏解釈」と題し、「第1番 ハ長調 BWV787」を、「豊橋創造大学短期大学部研究紀要 第19号」に、楽曲分析し演奏解釈した。この小論も、それらと同じ観点にたって、「三声シンフォニア」の「第2番 ハ短調 BWV 788」を取り上げたものである。

楽曲分析と演奏解釈

「W. F. バッハのための小曲集」⁴⁾において、この「Sinfonia 2」に該当する曲はない。

楽 曲 分 析 (譜¹⁾参照)

この曲は、二つの部分からなり、それぞれの部分は、次のような構成になっている。第2部には、主題は現れない。

- 1) 「二声インヴェンション」と「三声シンフォニア」という呼び名については、豊橋短期大学研究紀要第2号「J. S. バッハ作曲『二声インヴェンション』の楽曲分析と演奏解釈」藤本逸子1985年（以下「第2号における小論」）の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。
- 2) 作品名・書名・強調語句は、原則として「」に入れて表わす。
- 3) BWV = Bach - Werke - Verzeichnis, W. シュミーダーによる J. S. バッハ作品総目録番号。
- 4) 「W. F. バッハのための小曲集」については、「第2号における小論」の「『インヴェンション』について」の項を参照のこと。
- 5) この小論における「Sinfonia 2」に関する楽譜は、Johann Sebastian Bach「Inventionen und Sfnonien」Urtext (Barenreiter - Verlag, Kassel 1972) を用いている。国内においては、ベーレンライター社の許可を得て、全音楽譜出版社が、印刷出版している。

第1部 1~18⁶⁾ (18)

主 題 1~4 (4)

間奏1 5~6 (2)

間奏2 7~9 (2.5)

主 題 9~13 (4)

間奏3 13~15 (2)

終 止 15~18 (3.5)

第2部 19~32 (14)

間奏4 19~22 (4)

間奏5 23~24 (2)

間奏6 25~27 (3)

間奏7 28~29 (2)

終 止 30~32 (3)

各部分における楽曲分析

第1部

主 題

1~2・1~2 上声部に主題 (T) が現われる。(T) は、八分音符の上下する動きで分散和音を奏する要素 (a)、付点四分音符でオクターブ跳躍する要素 (b)、八分音符で順次上行する要素 (c)、(c) の反行形 (c') から成り立っている。

・1~2 中声部は、休止している。

・1~2 下声部は、(b) の反行形 (q) で始まり、(c) が続く。(a) がリズム的に変化した (a') と、(c) がリズム的に変化した (c') がその後をまとめ、上声部 (T) の対旋律のような役目を果たしている。

3~4・3~4 上声部は、(c) と八分音符でモルデント的動きをする (d) から成っている。

・3~4 中声部に、(T) がある。1~2 上声部の (T) を1オクターブ下に置いている。

・3~4 下声部は、3 初めに主音を鳴らした後、休止する。

間奏1

5~6・5 上声部は、(a') の後 F 音⁷⁾ を鳴らし、休止する。

・5 中声部は、休符の後、(c) のリズム的に凝縮した (c/) と、(c) のリズム的に凝縮した (c/) が置かれている。

・5 下声部は、(a) の後、As 音を鳴らし、その後は休符である。

・6 は、三声部とも 5 を2度下にゼクエントしている。

間奏2

7~9・7~9 上声部は、保続音的 Es 音を長く伸ばした後、(c/) を4回置き、g moll⁸⁾ の第3音 B 音に納まる。

6) 小節数は、数字を□で囲むことによって表わす。例、第4小節め→□4、第3小節めから3第10小節め→□3~□10。

7) 音名は、原則としてドイツ音名で表わす。例、変ロ音→B音、嬰へ音→Fis音。

8) 調名は、原則として、ドイツ音名を用い、ドイツ音名の太文字は長調、小文字は短調を表わす。例、ハ長調→C durあるいはC;、イ短調→a mollあるいはa;。

- ・ [7]～[9] 中声部は、和声的支えとなる音を鳴らした後、休止する。
- ・ [7]～[9] 下声部は、(a) (a) (c) (q) と続き、短2度下行と短2度上行の動きの後、g moll の主音に落ち着く。
- ・ [7]～[9] の間、c dur から g moll に転調している。

主 題

- [9]～[13] ・ [9]～[13] 上声部は、[8]～[9] 下声部のように短2度下行と短2度上行の動きをし、休止した後、g moll で (T) を奏でる。
- ・ [9]～[13] 中声部は、g moll の主音の後 (o) (d) (o) を続け、上声部に (T) が出てくるときは、和声音を鳴らして、(T) を和声的に支えている。
- ・ [9]～[13] 下声部は、g moll の (T) で始まり、(c) (d) (o) と続く。この (T) が、(T) としては、最低音域である。

間奏3

- [13]～[15] ・ [13]～[15] 上声部は、間奏1の中声部と同じことを g moll で行っている。
- ・ [13]～[15] 中声部は、間奏1の下声部と同じことを g moll で行っている。
- ・ [13]～[15] 下声部は、間奏1の上声部と同じことを g moll で行っている。

終 止

- [15]～[18] ・ [15]～[18] は、間奏3が間奏1を声部を変えて模倣しているように、間奏2を模倣しているが、終止に向かうため多少の変化をしている。
- ・ [15]～[18] 上声部は、間奏2の中声部にあたる動きをしているが、前半は休符を多用し、リズム的な動きとなっている。[18]に入ると、(o) のリズム的に拡大された (ox) が落ち着いた動きをし、g moll 主音に納まり、第1部を終止させている。
- ・ [15]～[18] 中声部は、間奏2の下声部にあたるが、後半、休符やシンコペーションを用いて、切迫感を出している。[18]では、(o/) (o/) の動きの後、g moll の V_7^9 の和声音を鳴らした後、g moll 第三音に終止している。
- ・ [15]～[18] 下声部は、間奏2の上声部にあたる。間奏2と比べて際だった変化はないが、(o) の最後の D 音は、第1部における最低音である。その D 音の後休符があり、その後、(c/) (c/) (c/) (o/) と続き、g moll 主音で終止している。

第2部

間奏4

- [19]～[22] ・ [19]～[22] 上声部は、(a) に続いて長くのびる Des 音、(a) に続いて長くのびる As 音と同じリズムで繰り返された後、(o/) (o/) (c/) (o/) (c/) (o/) とめまぐるしく十六分音符で動き回り、Es dur の第三音に落ち着く。
- ・ [19]～[22] 中声部は、(a') を休符ではさみ、(o/) (o/) で降下した後、[19]～[20]

9) 和音記号の和音の度数は、大きい字体のローマ数字 (音度記号) で表し、和音の形体は、アラビア数字 (形体指数) で表す。例 一度の和音→I, 属七の和音→ V_7

の上声部を模倣している。

- 19～22 下声部は、(o/) (o/) (o/) (o/) を休符ではさみ、上声部に (o/) が出てくるところは、逆にリズム的に拡大した (o×) (o×) を置き、上声部と中声部が付点二分音符でのびているところに (c/) (o/) と、十六分音符を配している。
- 19～22 の間、g moll から f moll を通って、Es dur に転調している。

間奏5

- 23～24 23～24 は、間奏1を変奏している。
- 23～24 上声部は、(a) がリズム的に変化した (a') に付点二分音符が続く形が2度の差で、ゼクエンツしている。これは、間奏1の下声部の変奏である。
- 23～24 中声部も、23～24 上声部に似た形でゼクエンツしている。これは、間奏1の上声部の変奏である。
- 23～24 下声部は、23～24 上声部・中声部の静と動が逆になる形で、両声部が付点二分音符でのびているところを (c/) (o/) で動き回り、これもゼクエンツしている。これは、間奏1の中声部の変奏である。
- 23～24 の間で、Es dur から c moll に転調している。

間奏6

- 25～27 25～27 上声部は、(o/) (o/) の後、和声を支える和声音を自由に鳴らし、(d) をリズム的に拡大した (d×) を配し、c moll の主音に落ち着く。
- 25～27 中声部は、休符の後、上声部の流れを受け継ぐように (o/) (o/) が流れ、(q) (a') (o) (d×) がそれに続き、c moll の第三音に納まる。
- 25～27 下声部は、長音の F 音、Es 音の後に、これも中声部の流れを受け継ぐように (o/) (o/) が流れ、(c×) と続き、c moll の主音に納まる。

間奏7

- 28～29 28～29 は、間奏5同様、間奏1の変奏である。
- 28～29 上声部は、休符を挟んで、2度の差がある二つの (a') がゼクエンツするように現れ、中声部の動きを受け取るように、(c/) (o/) がそれに続き、終止へと進んでいく。これは、間奏1の上声部の変奏である。29 後半は、間奏1の中声部を受け持っている。
- 28～29 中声部は、休符の後、(c/) (o/) (a) (a) と続き、終止に入っていく。これは、間奏1の中声部の変奏である。29 後半は、間奏1の下声部を変奏している。
- 28～29 下声部は、(a) (a) と動き、その流れを中声部に引き渡して、終止までは休符となる。これは、間奏1の下声部の変奏である。

終 止

- 30～32 30～32 は、第一部の終止同様、間奏2の変奏である。声部の役割も間奏2に準拠している。
- 30～32 上声部は、長くのびる c moll の主音の後、下声部の (c) の後半を補強

するような動きをして、c moll の属音で立ち止まり、中声部の (c/) を引き継ぐように (c/) で一気に1オクターブ駆け登り、カデンツに入り主音に終わる。

- ・ [30]～[32] 中声部は、休符と和声を支える動きした後、(c/) (c/) (c/) で属音に停まり、カデンツから E 音、すなわちピカルディ三度に入り、この曲を長三和音で終止させている。
- ・ [30]～[32] 下声部は、(a) (a) (c) の後第三音に停まり、(c/) で駆け下りた後、カデンツに入り主音に終わる。この最後の音が、この曲の最低音である。

演奏解釈 (譜2参照)

テンポ

テンポに関して、諸校訂版¹⁰⁾ は、表 I のような指示をしている。

表 I 諸校訂版における「Sinfonia 2」のテンポに関する指示

校訂者	テンポに関する指示	
Hans Bicschhoff	Andante con moto	♩.=60
Ferruccio Busoni	Moderato con moto	
Carl Czerny	Allegro vivace	♩.=100
S. A. Durand	Con moto	
Vilém Kurz	Andante con moto	
Julius Rötgen	Andante con moto	♩.=72
井口基成	Andante con moto	
千倉八郎	Andante	♩.=58

また、内外10人の演奏時間は、表 II のとおりである。

表 II 諸演奏家における「Sinfonia 2」の演奏時間

演奏者	録音年	楽器	演奏時間
Aldo Ciccolini	不明	ピアノ	1' 48"
Christoph Eschenbach	1974年	ピアノ	3' 04"
Glenn Gould	1963～64年	ピアノ	3' 05"
Tatyana Nikolayeva	1977年	ピアノ	2' 27"
András Schiff	1982～83年	ピアノ	2' 09"
高橋 悠治	1977～78年	ピアノ	2' 47"
田村 宏	不明	ピアノ	2' 07"
Kenneth Gilbert	1984年	チェンバロ	2' 14"
Gustav Leonhardt	1974年	チェンバロ	1' 43"
Helmut Walcha	1961年	チェンバロ	1' 42"

10) 各校訂版及び、各 CD の出版については、本小論の「参考文献・参考楽譜・参考 CD」の項を参照のこと。

どの演奏も、おおむねゆったりと大らかに演奏している。グールドとヴァルハでは、1'23"の差があるが、ヴァルハも決してスピード感のある演奏ではない。演奏時間においては、エッシャンバッハとグールドは、ほぼ同じ長さであるが、エッシャンバッハの整然とした美しい演奏に対して、グールドは自由にテンポを揺らした奔放な演奏となっており、全く異なる表現をしている。

筆者は、「Andante ♩.=63」というテンポをとる。少しゆったりめのAndanteで、c mollではあるが、深刻な雰囲気はなく、甘やかにcantabileな表現をしたい。

アーティキュレーション

全曲を通じて、*legato*に演奏する。区切りを感じるところには（|）を、ブレスがほしいところには（V）を、「譜2」に記した。

装飾音

装飾音は、長い音符をトリルで演奏する以外には必要を感じない。トリルの奏法は「譜2」に小音符で記した。

各部分における演奏解釈

①～②・*mf*で、始める。

- ・上声部（T）は、①7拍めのG音に向かって少し*cresc.*し、このG音を少々*ten.*する。このG音が、（T）のクライマックスである。続く②は、6拍め、7拍め、8拍めの減7度の音程にエネルギーを感じるように、*cresc.*と*dim.*する。
- ・下声部は、①の最初のC音でしっかり（T）を支え、②に向かって軽く*cresc.*し、②は、リズムを楽しむように流して、③のC音に納める。

③～④・①～②より少し控えめに、*mp*とする。

- ・上声部は、音の上行下行に合わせて、少し*cresc.*と*dim.*する。
- ・中声部は、①～②の上声部に準じて、*mp*で（T）を奏する。

⑤～⑥・③～④に引き続き、*mp*で奏する。

- ・上声部は、6拍め7拍めの7度音程を意識して少々*dim.*する。
- ・中声部の十六分音符は、音の上行下行に合わせて、軽やかに美しく*cresc.*と*dim.*する。
- ・下声部は、八分音符の上行に合わせて、少々*cresc.*する。ただし、上声部同様、6拍め7拍めは、7度音程を意識して少々*dim.*する。

⑦～⑨・⑦から*cresc.*し、⑧は少し強めの*mf*を響かせ、⑨は*dim.*して間奏2を静かに納める。

- ・上声部は、⑦では、八分音符に対して4音入れる三十二分音符のトリルを11拍弾き、最後の12拍めは、八分音符でEs音を弾き、⑧のEs音とタイで結ぶ。上声部の十六分音符の動きは、⑧では豊かに響かせ、⑨では静かに納める。

- ・ 中声部は、リズムを楽しみながら、和声を支える動きをする。
 - ・ 下声部は、八分音符で *cresc.* し、付点四分音符で上声部を支える。
- 9～13
- ・ *f* と *mf* で、1～4 に準じた演奏をする。前半の下声部の (T) は、豊かな低音の絃の響きを楽しむようにする。
- 13～15
- ・ *mf* で、5～6 に準じた演奏をする。c moll から g moll に転調していることと、十六分音符の動きが上声部にあることにより、5～6 より、幾分華やかな雰囲気を出すようにする。
- 15～18
- ・ おおむね 7～9 に準じた演奏であるが、*cresc.* は *f* までもっていく。十六分音符の動きが下声部に移ることによって、迫力が加わる。そのことを意識した音を出したい。18 の終わり近くは、*dim.* しながら、少々テンポをゆるめ第1部を納める。
- 19～22
- ・ *P* で、奏する。この間にこの曲最大のクライマックスがある。それを *P* で美しく表したい。
 - ・ 上声部は、19 6拍めと7拍めの Des 音を大事にしたい。この Des 音で、g moll から f moll へと急激に転調する。意表をつく転調であり、非常に美しい転調である。それを Des 音で充分感じたい。19 20 の八分音符の動きにそって自然に *cresc.* する。21 22 の十六分音符は、その上下の流れに沿って自然に *cresc.* と *dim.* する。それは決して大げさではなく穏やかに行う。22 の最初の C 音が、この曲最大のクライマックスである。強い音ではなく、丁寧に弾くことによってクライマックスを表現する。
 - ・ 中声部は、19 ではリズムを楽しみ、20 では十六分音符の流れを楽しむ。21 22 は、上声部の 19 20 を模倣する。
 - ・ 下声部は、19 20 では十六分音符の流れを楽しみ、21 22 ではリズムを楽しみながら、和声的に上の二声を支える。22 後半の十六分音符は、次の間奏6への橋渡しのように流し、クライマックスの余韻を漂わせる。
- 23～24
- ・ 5～6 と 13～15 に準じた演奏であるが、十六分音符が下声部に移ったこと、また、上声部と中声部が高音域にあることで下声部との距離が広がったこと、これらにより、第1部の時より迫力と華やかさを加えてに演奏する。そして、この間に *cresc.* し、次の間奏7の頭を *f* で迎えるようにする。
- 25～27
- ・ *f* で、始まる。十六分音符の下降する流れを上声部、中声部、下声部と受け渡し、下声部のところでは、少しを *dim.* かける。27 の最後では、ほんの少々テンポをゆるめ 28 の頭に一旦落ち着く。十六分音符以外の音は、リズムの変化と和声を支える役目を負い、主張することはない。
- 28～29
- ・ おおむね 5～6、13～15、23～24 に準じた演奏を *mp* であるが、13～15 や 23～24 より、控えめな表現とする。
- 30～32
- ・ 7～9 と 15～18 に準じた演奏であるが、*cresc.* は *mf* どまりとする。32 からは、テンポをゆるめる。上声部と下声部は十六分音符の動きにそって *cresc.*

する。次に続く八分音符と四分音符の動きは、音量は控えめとするが、堂々としたテンポとし、美しくピカルディ三度を響かせ、この曲を閉じる。

おわりに

「Sinfonia 2」は、c mollであるが、深刻さや悲劇性はなく、むしろ、甘やかでロマンチックな曲である。32小節の間に、テーマはたった4回しか現れず、第2部には、テーマが出てこない珍しい曲である。しかし、一見自由に見える間奏は密接な関連性を持っており、それは、非常にバッハらしい緻密さで構成されている。

テンポに関してであるが、内外10人の演奏家は、誰1人として、Allegro vivaceに感じさせる演奏はしていない。一時期、日本で出版される「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」の楽譜のほとんどは「Czerny版」に準拠していた。その「Czerny版」では、この「Sinfonia 2」をAllegro vivaceとしている。これは、何を意味しているのであろう。日本が西洋音楽を教育に取り入れ始めた頃、楽譜の入手、エディションの選定は、どのように行われていたのであろうか。また、ツェルニーと言えば、ベートーベンの弟子である。ベートーベンは、バッハについて、どのように弟子に伝えていたのであろうか。いろいろ興味をそそる現象である。

第2部間奏4

主題

19

g:→f:→Es:

21

Es:

23

間奏5

Es:→C:

25

間奏6

C:

27

間奏7

C:

30

終止

ピカルデ三度

C:

譜2 「Sinfonia 2」 BWV 788 1~32 (演奏解釈)

Andante cantabile

1 Tのクライマックス

mf

mp

4

7 cresc. mf f

10 Tのクライマックス Tのクライマックス mf

14 cresc.

17 dim.

少しテンポをゆるめる

19

p

この曲最大のクライマックス

21

23

cresc.

25

f *dim.*

27

mp

ほんの少々テンポをゆるめる

30

cresc. *mf*

堂々としたテンポでピカレティ三度を美しく

参考文献・参考楽譜・参考 CD*** 参考文献**

- 市田儀一郎 1983年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(音楽之友社)
 山崎 孝 1984年「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」(ムジカノーヴァ)

*** 参考楽譜**

- Johann Sebastian Bach 「Klavierbchlein fr Wilhelm Friedemann Bach」 Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1979)
 BACH 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Barenreiter-Verlag, Kassel 1972)
 J. S. BACH 「Inventionen Sinfonien」 Urtext (G. Henle Verlag, München 1978)
 J. S. Bach 「Inventionen und Sinfonien」 Urtext (Musikverlag Ges. m.b. H & Co., K. G., Wien 1973)
 BACH 「INVENTIONEN UND SINFONIEN」 Urtext (Edition Peters, Berlin 1933)
 Johann Sebastian Bach 「TWO- and THREE-PART INVENTIONS」 Facsimile of the Autograph Manuscript (Dover Publications, Inc., New York 1978)
 J. S. BACH 「15 INVENTIONEN」 Hans Bischoff (Steingraber Verlag, Offenbach)
 BACH 「TOW- and Three-Part Inventions」 Ferruccio Busoni (G. Schirmer, New York 1967)
 J. S. BACH 「Inventions 2 et 3 voix」 Durand S. A. (Editions Musicales, Paris 1957)
 BACH 「DVOUHLASE INVENCE A TRIHLASE SINFONIE」 Vilém Kurz (Editio Supraphon, Praha 1981)
 JOH. SEB. BACH 「ZWEI-UND DREISTIMMIGE INVENTIONEN」 Julius Rötgen (Universal Edition, Hungary 1951)
 長岡敏夫編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」原典版(音楽之友社 1965)
 角倉一朗校訂「バッハ・インヴェンションとシンフォニア」原典版(カワイ出版 1983)
 全音楽譜出版社出版部編「バッハ インヴェンション」(全音楽譜出版社)
 Hans Bischoff 角倉一朗訳「J. S. バッハ インヴェンションとシンフォニア」(全音楽譜出版社 1972)
 井口基成「バッハ集 二声部インヴェンション 三声部インヴェンション 小前奏曲・小フーガ」(春秋社 1983)
 千倉八郎編「バッハ インヴェンションとシンフォニア」(日音楽譜出版社 1983)

*** 参考 CD**

- Aldo Ciccolini (Piano) 「J. S. BACH INVENTION」 TOCE6601 (TOSHIBA EMI)
 Christoph Eschenbach (Piano) 1979 「INVENTION & SINFONIA」 F26G20323 (POLYDOR)
 Glenn Gould (Piano) 1989 「BACH INVENTIONS & SINFONIAS」 28DC5246 (CBS SONY)
 Tatyana Nikolayeva (Piano) 1986 「J. S. Bach INVENTIONS AND SINFONIAS」 VDC-1079 (VICTOR)
 Andárs Schiff (Piano) 1985 「J. S. BACH 2&3 PART INVENTIONS」 FOOL-23100 (POLYDOR)
 高橋悠治 (Piano) 1991 「インヴェンションとシンフォニア 他」 COCO-7967 (NIPPON COLUMBIA)
 田村 宏 (Piano) 1989 「J. S. バッハ インヴェンション」 CG-3722 (NIPPON COLUMBIA)
 Kenneth Gilbert (Cembalo) 1985 「J. S. BACH INVENTIONEN UND SINFONIEN」 POCA-2113 (ARCHIV)
 Gustav Leonhardt (Cembaro) 1992 「バッハ：インヴェンションとシンフォニア」 BVCC-1863 (BMG VICTOR)
 Helmut Walcha (Ammer-cembaro) 1961 「J. S. バッハ／2声部のためのインヴェンション&3声部のためのシンフォニア」 TOCE-7231 (TOSHIBA EMI)